聖書を、もっと身近な一冊に

聖書に親しむ講座　レジュメ｜2026 年 11 月 23 日｜大分教区司祭　山下　敦

「神の言葉は生きており、力を発揮し…」（ヘブライ人への手紙 4:12）

今日のポイント（二つ）

1. **聖書は、読まれて初めて力を発揮する。続けて読む人には、必ず恵みがある。**
2. **聖書を、部分的にではなく、連続性と一体性において読む。**

第 1 部　みことばは、読まれてこそ力を発揮する

- 聖書は、本棚に飾っておく本ではなく、読む本。
- 問題は「どのように聖書に触れるか」。定期的に、できるだけ毎日。

第 2 部　ミサで触れる聖書と、聖書そのものの一体性

- ミサの朗読には、みことばの典礼としての重要性や機能がある。ただし聖書には、「部分的に読まれるために書かれた本は一冊もない」。
- 例：ルカ 10 章　よきサマリア人 → マルタとマリア → 主の祈り。前後をつなげて読むと、読み方や理解、解釈が変わる。
- 原則：部分だけで解釈せず、連続性・一体性において読む。

第 3 部　聖書を毎日の習慣にするために

- ① どれぐらい：負担にならない量、毎日 1〜2 章？大切なのは「継続」。わからなくても止まらない。
- ② どこから：おすすめは新約、特に福音書から。自分も登場人物の一人として読む。
- ③ 新約の連続通読：マタイから黙示録まで読んだら、またマタイへ。繰り返すと、旧約への関心も生まれる。
- ④ 自由に：「聖書 100 週間」「セブンステップ」、日本聖書協会の通読法など。自分の好きな、自分に合う方法で。

第 4 部　マタイ 25 章を続けて読む ―― 三つのたとえをつなぐ「油」

たとえ	読まれた日	見えてくること
（一）十人の乙女 （１～１３節）	11 月 8 日 年間第 32 主日	問い：準備しておくべき「油」とは？ 油は、自分にしか準備できない（分けたくても、分けられない）。
（二）タラントン （14～３０節）	11 月 15 日 年間第 33 主日	時間と命（タラントン）は、力に応じて預けられている。三番目の僕は、主人（愛である神）を知らなかったので、恐れと自己保身からタラントンを隠した。 → **油とは？の答え①：**神を信頼し、時間と命を、主人の思いに沿って使う。
（三）すべての民族を裁く （３１～４６節）	11 月 22 日 王であるキリスト	「いつしたでしょうか」／「いつしなかったでしょうか」は決定的な対照。 愚かなおとめ・三番目の僕・裁かれる人々に共通するのは、「しなかったこと」と「気づかなさ」（＝ルカ 16 章「金持ちとラザロ」の金持ち）。 救われる人々の生き方：山上の説教（マタイ 5〜7 章）から教えられてきた、「見返りを求めず、隠れたところで善行をする、父の子として」の生き方の完成。 → **油とは？の答え②：**困っている小さな人への、見返りを求めない隣人愛の実践。

第 5 部　三つのたとえがつながるとき ―― 聖書を、もっと身近な一冊に

- 油とは、信仰・希望・愛。
- 三つのたとえを合わせて読む。単独では見えないメッセージがある。
- 聖書を読むことも祈り。日々、少しずつでも、続けて読んでいく。

――――――――――――――――――――　メ　モ　――――――――――――――――――――